

日野誕生院

法界寺の伝承遺品をもとに

親鸞聖人が誕生された地がどこであったのかについては、はっきりしたことはわかっていません。

江戸時代の中期以降になりますと、各地の門徒のあいだで、親鸞聖人の御旧跡を訪ねる旅が盛んになっていきました。いわゆる「巡拝」です。そして、聖人の御旧跡として、ご誕生の地がどこかと、人々の注目を集めることとなりました。そこで、本願寺第19代本如上人によって、親鸞聖人の誕生地の調査が進められました。そのようななか、京都から南東に離れた日野の地は、聖人の出自にあたる日野氏とゆかりの深い地でしたので、ここが注目されるようになりました。

日野の地には、日野氏の菩提寺の法界寺があり、ここに聖人の父の有範の木像と聖人幼少の像が所蔵されているとともに、境内には聖人の「産湯井戸」や「胞衣塚(えなづか)」と伝えられるものがあることがわかりました。

そこで、これらの伝承遺品をもとに、聖人のご誕生を顕彰することになり、文政10年(1827)には「有範堂」が建てられ、文久2年(1862)には「誕生講」が結ばれ、聖人のご誕生を讃仰されるようになりました。明治11年(1878)に有範堂は「日野別堂」と改称され、翌々年、法界寺から堂舎や宝物を譲り受けました。さらに昭和6年(1931)に「日野誕生院」と改称され、御堂が落成しました。この時完成したのが現在の誕生院本堂です。

誕生院は、西向きの本堂に対して、南北と西に回廊をもつ形式で、通常の真宗寺院とは趣きを異にするものです。これは、親鸞聖人が誕生された平安時代の建築様式を参考にして創建されたものです。こうして日野誕生院は「親鸞聖人ご誕生ゆかりの地」として人々に知られています。(岡村喜史)